

活動ピックアップ!

長岡
地域
Nagaoka

T_R_Workers_NAGAOKA

職業で得た知識や技術を活かした災害支援集団



私たちは、消防職員として勤務しているメンバーで結成した団体です。仕事で培った技術・技能を活かして、日本各地の災害ボランティアに参加。「ボランティアにしかできないこと」があると強く感じ、昨年から地元長岡でも活動を開始しました。屋根上など危険個所での除雪中の事故を減らすために私たちの技能が役に立つのではないかと考え、関係機関と協力して除雪活動も行っております。

市民活動 虎の巻

「解説動画」は
こちら!

寄付につなげる!

活動報告で信頼関係を築こう編

3号に渡り紹介してきた「寄付につなげる」最終回。寄付金は受け取った後が肝心!

今後も応援し続けてもらえるように、寄付者との信頼関係が深まる活動報告のポイントをご紹介します。

POINT 1 ムリなく続けられる方法で 活動を見る化



POINT 2 効果的に活動報告!

活動の意義を伝えよう

- 実施内容やイベントの様子がわかる写真
- 参加者からの声

関りしろをつくろう

- 今後の予定
- 協力してほしいこと、協力できることのPR

次回の寄付につなげるための もう一工夫!

金額に応じた支援内容を具体的に提示しましょう。寄付金がどんなことに活かされるのかが明確な活動に、寄付は集まりやすいと言われています。

例) 寄付で実現できること
1,000円 団体パンフレット増刷 50冊分
3,000円 地域の茶の間 暖房費一週間分

センターからのお知らせ

好きな時間に好きな場所で視聴できる／

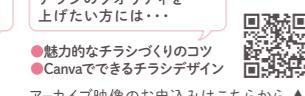
学びの場アーカイブ映像のご案内

市民活動のノウハウを学ぶ講座「学びの場」では、過去の講座のアーカイブ映像をご用意しています。お申込みいただいたメールアドレスに動画のURLが届くので、好きな時間に好きな場所でご覧いただけます。あなたの活動に、ぜひお役立てください。

おすすめ講座

新年度に向けて団体の方向性を見直したい方には…
● ビジョンからはじめる未来のプランづくり

イベントの集客力を高めたい方には…
● イベントの集客力を高めたい方には…
● 魅力的なチラシづくりのコツ
● Canvaでできるチラシデザイン



発行



ながおか
市民協働
センター



つながる
好きになる
らこって



つながる
ラジオ



市民活動の
ポータルサイト
コライト

配布場所

長岡市役所及び各支所、サービスセンターの他、市内図書館、コミセン、子育ての駅等、公共施設に設置しています。



知る、つながる、好きになる
ながおか市民活動情報誌



特集
ファザーリング・ジャパンにいがた
荒木 隆幸さん
産後ケアハウス ねんねこ
ファミリー・サポート・センター

NAGAOKA PLAYERS
高橋 和美さん

活動ピックアップ

T_R_Workers_NAGAOKA

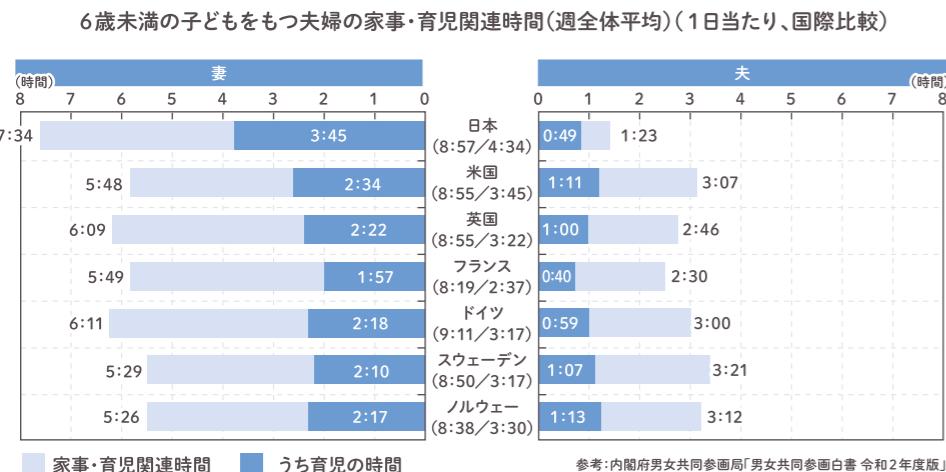
長岡みんなのSDGs
三容株式会社

「子育て」を「孤育て」にしないために ～地域のみんなでできること～

幼い頃、「男の子は、泣いたらダメ」「女の子なんだから、女の子らしくしていなさい」と言われたことはありませんか。このような性別に対する無意識の思い込みや偏見を「ジェンダーバイアス」と言います。現代では、これまで女の子向けに作られていたお世話人形が性別問わず遊べるようにリニューアルされたり、性別問わず自由に選ぶことのできる「ジェンダーレス制服」が導入されたりと、これまで当たり前にあった性別による制限を撤廃する動きが出てきています。

家事・育児における男女格差

一方、未だに男女によって大きな差があるもののひとつが、家事・育児にかけている時間です。



内閣府男女共同参画局によると、一日に家事と育児に割く時間は男性が1時間23分、女性は7時間34分でした。どの国も男性と女性の家事・育児時間の差は2倍前後に留まっている一方、日本では何と約5倍の差があります。この差の背景には何があるのでしょうか。

男性の家事・育児参加を阻む壁

男性が家事や育児に割く時間が女性に比べて短い要因は大きく2つあると言われています。1つ目は、女性と比較して男性が長時間労働であること。OECD(経済協力開発機構)が2020年にまとめたデータによると、男性の有償労働時間は452分、女性は272分。男女間で約1.7倍の差があり、国際的に見てもその差は大きいと言われて

います。2つ目は、女性と比べ男性は育児を理由に仕事を休みにくいことです。背景には「男性は外で働き、女性は家を守るもの」という昭和的な価値観が根強く残っている現状があります。男女共同参画社会の実現や男性の育児参加促進を目的として活動している「ファザーリング・ジャパンにいがた」に所属し、自身も2人の子どもを育てている荒木隆幸さんは言います。「7年前、私自身も育児休暇の取得に苦労しました。当時の社会には、女性が家事・育児をする方が子どもの幸せにつながるという意見や働き盛りの男性が育児休暇を取ると、その分仕事での成長や学びの機会が失われてしまう」という考え方もありました。



ファザーリング・ジャパンにいがた メンバー
荒木 隆幸 さん

家事・育児から得られるもの

無事育児休暇を取得し、今もパートナーと家事や育児を分担している荒木さん。実際に日々仕事をしながら、家事や子育てに取り組む中で、どのような気づきがあったのでしょうか。「家事・育児

をすることで仕事の効率が上がりました。家事や育児で身に付けた段取りを考える習慣が、仕事に活きています。また、どちらか一方に負担がかかることがないので、家庭が円満で子どもももしかわせそうです。男性の家事・育児参加は、女性の社会参加の機会が増えるだけでなく、仕事のスキル獲得という面でもメリットがあるようです。「男性は外で働き、女性は家を守るもの」という考え方には、女性だけではなく男性の選択肢も狭めてしまっているかもしれません。

地域が今できること

子育ては、各家庭で夫婦間の家事・育児の分担を調整するだけでうまくいくものではありません。少子化の背景には、都市化や核家族化、地域の人間関係の希薄化等によって、各家庭での育児への不安感や負担感の増大、育児の孤立化という深刻な問題があります。子育てしている人たちが孤立しないために、「子育ては各家庭がするもの」という価値観もまたアップデートし、子どもの一時預かりや精神的なサポートなど地域全体で子育てができる環境を整えていくことが求められています。

市民活動で支える ～産後ケアハウス ねんねこ～

「産後ケアハウスねんねこ」は、育児中のママが社会で孤立せず、困ったときには助けを求められます。



ねんねこは、親子にとって安心して通える癒しスペースになっている。

る場所が地域に必要だと感じた代表の吉原祐子さんが2018年に開設。妊娠・出産後の母子への相談やデイサービス等を行う施設として、当初は地域の開業助産師や栄養士による相談対応を中心に行っていました。その後母子保健推進員や子育て支援員らのサポートもあって利用者が増え、2021年度からは乳幼児の一時預かり事業も開始。長岡市に住む親子にとってより心強い存在になりました。現在は、同じようにママたちの手助けをしたい仲間が集まり、育児中の気分転換ができるような親子向けのイベントを開催しています。

産後ケアハウスねんねこについて、詳しく知りたい方はこちら！



子育ての援助をマッチング ～ファミリー・サポート・センター～

「ファミリー・サポート・センター」は、長岡市子ども・子育て課が行っている、子育ての援助を受けたい人(依頼会員)と援助したい人(提供会員)をつなぐサービスのこと。会員登録すると、提供会員から保育施設や学校、学童保育などの送迎、保護者の病気や就労、外出時の預かりなどのサポートを受けられます。生後2ヶ月から小学校6年生まで(障がいのあるお子さんは中学校3年生まで)のお子さんがいる方が対象で、利用料金はかかりますが一部市からの補助を



ファミリー・サポート・センターの提供会員へ、お子さんを引き渡している様子。

受けられます。子育てをしている家庭には、心強いサービスです。

ファミリー・サポート・センターについて、詳しく知りたい方はこちら！



このように、長岡市では子育てをサポートする環境が整いつつある一方、特定の学年の一時預かりの場が不足しているという課題もあります。またこうした活動がボランティアの活躍で支えられていることを考えると、より様々な年代の子どもたちを預かれるようにするにせよ、子育てサポートの場を拡充するにせよ、より多くの担い手が必要です。

「子育て」を「孤育て」にしないために

「子育て」が「孤育て」になってしまふ要因は、「家事・育児は女性がすべき」「子育ては親がすべき」という考え方があるのではないか。荒木さんによると、女性自身が「家事と育児は女性がしなければいけない」と思い込み、パートナーに頼れない現状もあると言います。子育てをしている人たちが孤立しない社会をつくるために、まず私たち一人ひとりにできることは、性別における「○○すべき」という考え方を果たして人を幸せにするのか、今一度考えてみるとどうでしょうか。そして次に、地域に子育てをしている人たちが頼れる場所をつくり、「自分たちだけで頑張らなくていいんだ」と思える環境をつくること。未来の子どもたちのためにも、子育て世帯にやさしいまちにしていきたいですね。

*内閣府男女共同参画局「男女共同参画白書 令和2年度版」
【参考】
内閣府子ども・子育て本部「平成19年版 少子化社会白書」

NAGAOKA PLAYERS ウワサのあの人インタビュー!

高橋 和美 さん

46歳／カフェ店員／
まちなかコミュニティ食堂代表
1976年長岡市生まれ。2人の小学生を含む4人家族。2020年より両親との二世同居をはじめた。



自ら気づき、行動したことで得た 「私という存在」

長男が当時まだ生後半年のとき、病気で入院となり、4歳の長女を残して一週間の付き添い生活を体験した高橋和美さんは、ふと自分が社会から取り残されたような孤独を感じたといいます。

社員食堂や福祉施設で調理師をしていた高橋さん。仕事と家庭を両立し、多忙なことがあってもそれが当たり前と

思い、頼られている自分にやりがいを感じていました。それが子どもとふたり、一日中ベッドの上で過ごす中、「私がいなくても誰も困らず、世の中が回っている。職場にも家庭にも必要とされていないのかも知れない」と、自分の存在価値を見失ってしまいました。そんな経験から高橋さんは、育児期間

の親子それぞれの心の動きについて興味を持つようになりました。親子間の対話や接し方について学びました。そして「私と同じように母親の孤独感や育児の辛さを感じている方たちの助けになれば」と、子どもの健全育成を目的とした団体を立ち上げたり、地域活動に積極的に関わったりするようになったのだそうです。

彼女の周囲には、協力者やPTAなどを通じた多くのつながりが生まれました。そんなある日、知人から「一緒に地域食堂をやらない?」と持ちかけられます。月一回コミュニティセンターで、赤ちゃんからお年寄りまで安心して利用で

きる地域食堂の取り組み。高橋さんは二つ返事で参加することに決めました。「人は楽しく食べることで元気になれるんだ」と、調理師時代に抱いていた想いや、少しでも人の役に立てばとの気持ちからでした。

「多世代交流」が特徴の一つでもあるこの食堂で、高橋さんには、利用される方や運営仲間、またそれらの垣根も関係ないほどに多様なつながりができました。自らの経験で得たものが、同じ境遇の方の救いとなると気づいたことで、いつしか自身の存在を肯定できるようになっていったそうです。「みんなとおしゃべりし

ながら、仕事も子育ても完璧を目指さなくていいんだ、と多くの人が気づけるような、緩やかであたたかなコミュニティづくりをこれからも大切にしていきたいです。



まちなかコミュニティ食堂